

令和5年 11月30日	農作物病虫害発生予報 12月	山口県病虫害防除所
----------------	---------------------------------	-----------

～目 次～

I	予報の概要	1
II	予報	
	【主要病虫害】	2
	【その他の病虫害】	5
III	参考(予報の見方、気象予報)	6

I 予報の概要

農作物名	病虫害名	予想発生量	現 況	
			平年比	前年比
イチゴ	灰色かび病	平年並	平年並	多
	うどんこ病	やや少	やや少	少
	アブラムシ類	やや多	多	多
	ハダニ類	平年並	平年並	多

お問い合わせ先

山口県農林総合技術センター(山口県病虫害防除所)

TEL (0835)28-1211 (代)

FAX (0835)38-4115

E-mail a172011@pref.yamaguchi.lg.jp

Ⅱ 予報 【主要病害虫】

イチゴ

1 灰色かび病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	多	発病初期

(2) 予報の根拠

ア 11月下旬の巡回調査では、発生ほ場率5%（平年3.8%）、発病株率0.1%（平年0.1%）、発病果率0.0%（平年0.0%）で平年並みであった（±）。

イ 気象予報では、気温は平年並か低い（+）。

(3) 防除対策

<耕種的防除等>

ア 多湿条件で発病が助長されるため、換気等により施設内が多湿にならないよう努める。

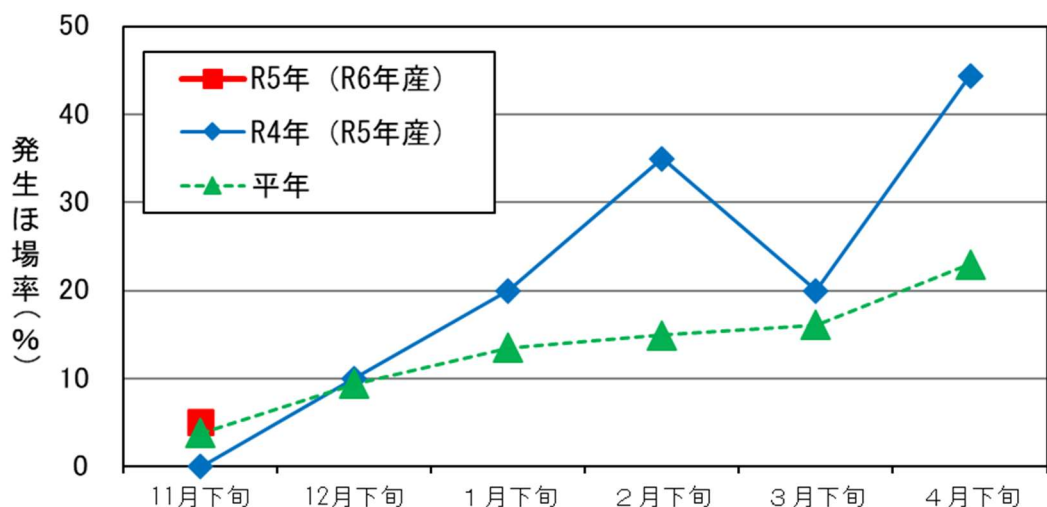
イ 被害果等は伝染源となるので、早期に取り除き、ポリ袋等に密封してほ場外に持ち出し、焼却や土中に埋めるなど適正に処分する。

ウ 窒素過多による軟弱、過繁茂な生育が発生を助長するため、適正な施肥管理に努める。

<防除のポイント>

ア SDHI剤（アフエット剤）、QoI剤（アミスター剤）、ポリオキシシン剤およびジカルボキシイミド剤（スミレックス剤、ロブラール剤）は耐性菌が出現しているため、薬剤散布後に防除効果が劣る場合は他の薬剤を使用する。

イ 薬剤耐性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。



イチゴ灰色かび病の発生推移

2 うどんこ病

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
やや少	やや少	少	発病前、発病初期

(2) 予報の根拠

ア 11月下旬の巡回調査では、発生ほ場率10.0%(平年20.0%)、発病株率0.6%(平年3.8%)、発病葉率0.2%(平年1.1%)、発病果率0%(平年0.5%)で平年に比べやや少なかった(一)。

(3) 防除対策

<耕種的防除等>

被害茎葉、被害果は伝染源となるので、施設外に持ち出し処分する。

<防除のポイント>

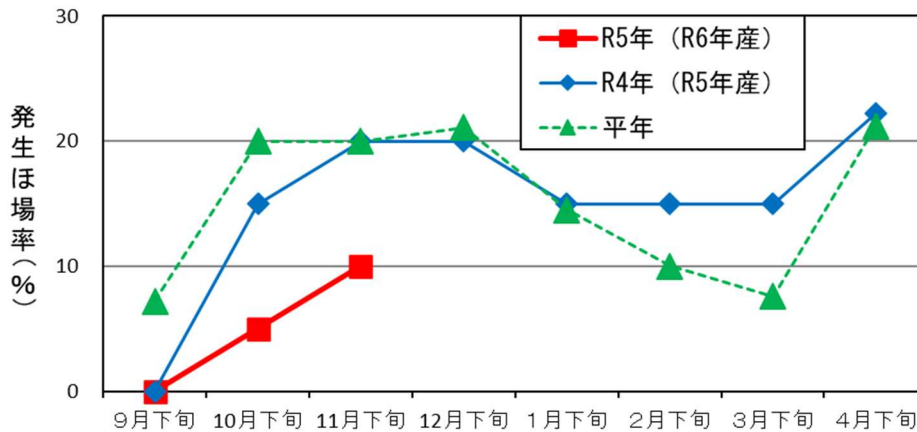
ア 本病は、発病初期には葉裏に発生しやすいため、葉裏をよく確認し、早期発見に努める。

イ 予防防除と発病初期の防除に重点をおき、薬液が葉裏や新芽にも十分かかるよう、古葉を除去して丁寧に散布する。

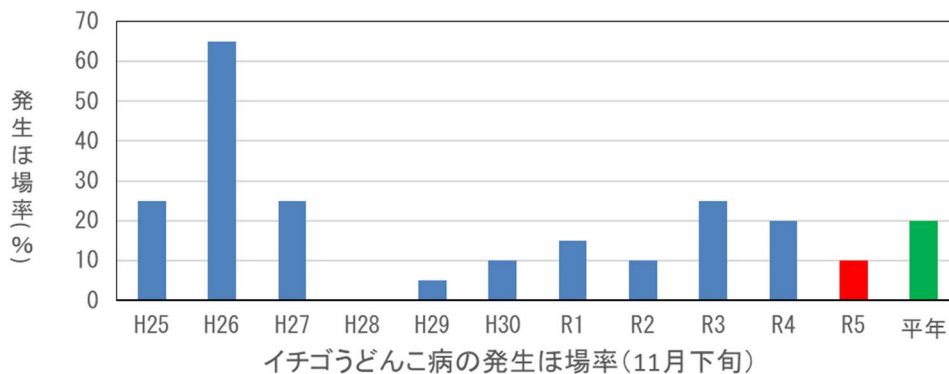
ウ DMI剤(トリフミン剤)、QoI剤(アミスター剤)は耐性菌が出現しているため、必ず防除効果を確認し、防除効果が劣る場合は他の薬剤を使用する。

エ 薬剤散布後は防除効果を確認し、その後も発生が認められる場合は、約7日おきに1~2回薬剤を追加散布する。

オ 薬剤耐性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。



イチゴうどんこ病の発生推移



3 アブラムシ類

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	多	多	発生初期

(2) 予報の根拠

ア 11月下旬の巡回調査では、発生ほ場率45.0%(平年26.4%)、寄生株率10.8%(平年4.9%)で平年に比べ多かった(+)。

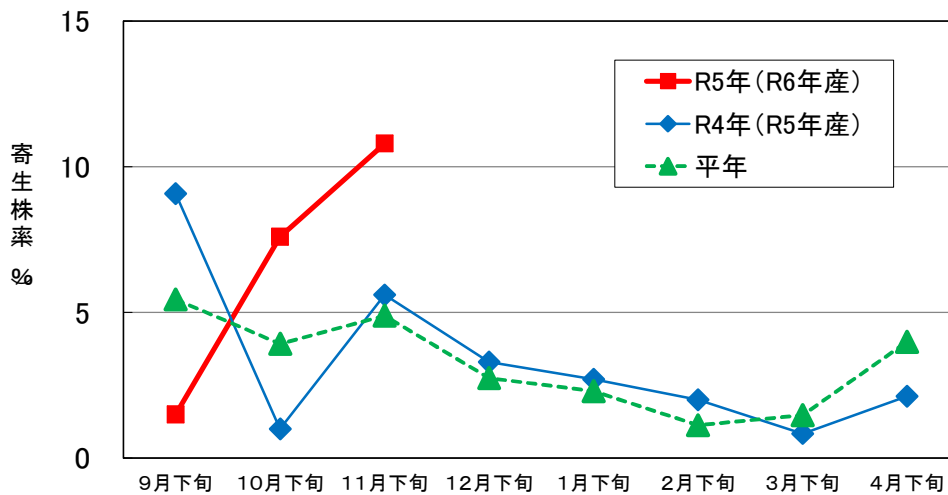
イ 気象予報では、気温は平年並か低い(-)。

(3) 防除対策

<防除のポイント>

ア 薬剤散布時は、葉裏までムラなくかかるよう十分な量の薬液を散布する。

イ 薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。



イチゴ アブラムシ類の発生推移

4 ハダニ類

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	多	発生初期

(2) 予報の根拠

ア 11月下旬の巡回調査では、発生ほ場率15.0%(平年28.0%)、寄生株率4.1%(平年7.4%)で平年並みであった(±)。

イ 気象予報では、気温は平年並か低い(-)。

(3) 防除対策

<防除のポイント>

ア ほ場をよく観察し、発生を認めたら直ちに防除を行う。

イ 薬剤防除の前には、薬剤が葉裏まで十分かかるように下葉を除去する。また、

除去した下葉は、ほ場外に持ち出し適正に処分する。

ウ 気門封鎖剤を使用する場合は、その多くがハダニ類の卵には効果が低く、残効性がないため、7～10日間隔で散布する。

エ 薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。化学農薬に対する抵抗性が発達しているため、散布後に効果を確認し、十分な効果が認められない場合は、気門封鎖剤を中心に防除を行う。

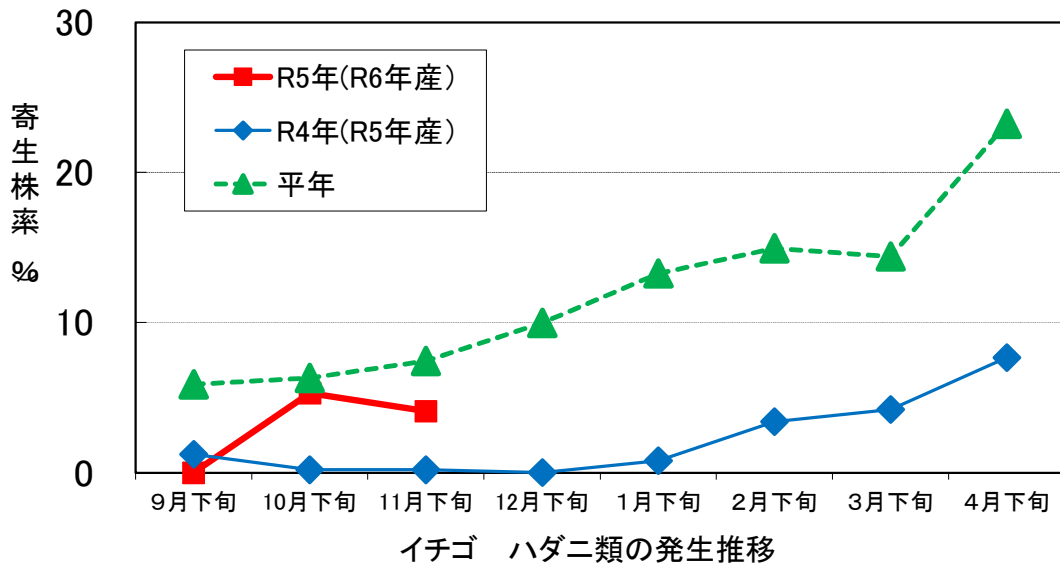
オ 天敵（ミヤコカブリダニ）は次のことに注意して使用する。

(ア) ハダニの発生前、または天敵に影響の少ない薬剤でハダニ類の密度を低下させた後、天敵を放飼する。

(イ) 天敵を放飼した後は、天敵に影響の少ない薬剤（マイトコーネ剤、ダニコング剤、スターマイト剤等）を使用する。

(ウ) 硫黄のくん煙は1日2時間程度とする。

カ 開花期以降の薬剤散布は、ミツバチに影響の少ない薬剤を使用する。



【その他の病害虫】

作物名	病害虫名	予想発生量	現況		発生ほ場率		備考
			平年比	前年比	本年(%)	平年(%)	
イチゴ	アザミウマ類	平年並	平年並	前年並	25.0	13.7	
	コナジラミ類	少	少	前年並	5.0	21.9	

Ⅲ 参考

1 予報の見方

(1) 病虫害発生量の基準（原則として過去10年間の発生量と比較）

ア 平年比

多	過去10年間で最も多かった年と同程度以上の発生
少	〃 で最も少なかった年と同程度以下の発生
やや多	〃 で2～3番目に多かった年と同程度の発生
やや少	〃 で2～3番目に少なかった年と同程度の発生
平年並	〃 で標準的にみられた発生（上記4項目を除くもの）

注：過去の発生量との比較を表わすもので、被害や防除の必要性とは異なる）

イ 前年比

多	平年比の5段階評価で区分し、前年の評価より多い発生
少	〃 前年の評価より少ない発生
前年並	〃 前年の評価と同等の発生（上記2項目を除くもの）

(2) 病虫害発生時期の基準（原則として過去10年間の発生時期と比較）

早 い	過去10年間の平均値より6日以上早い
遅 い	〃 より6日以上遅い
やや早い	〃 より3～5日早い
やや遅い	〃 より3～5日遅い
平年並	〃 を中心として前後2日以内

(3) 予報根拠における発生要因の評価基準

+	発生を助長する要因
±	発生の助長及び抑制に影響の少ない要因
-	発生を抑制する要因

2 気象予報

(1) 概要

1 か月気象予報（11月25日福岡管区気象台発表）

予 報	低 い (%) 少 ない	平年並 (%)	高 い (%) 多 い
気 温	4 0	4 0	2 0
降 水 量	5 0	3 0	2 0
日 照 時 間	2 0	4 0	4 0

週ごとの気温傾向

予 報	低 い (%)	平年並 (%)	高 い (%)
1 週 目	5 0	3 0	2 0
2 週 目	6 0	3 0	1 0
3～4 週 目	2 0	4 0	4 0